サイコグラフィック変数としての人格特性的自己効力感（GSE）の検討
－トライアスロン参加者を事例に－

The Case Study of the Generalized Self-Efficacy as a Psychographic Variable: The Study for Triathlon Participators

スポーツビジネス研究領域
５０１４Ａ００６－７　宇高 佳那　　研究指導教員：原田 宗彦 教授

1. 緒言

近年多くの地方自治体が地域活性化策として観戦型･参加型のスポーツ大会を誘致している。しかし木村（2009）はランニングイベントが大衆化したことによる大会のコモディティ化を指摘しており、スポーツ大会が増加することによる大会の差別化の困難さを指摘している。

このような状況の中で増加している大会としてトライアスロン大会があり、日本トライアスロン連合によると 2014 年度は 2008 年比 25 パーセント増の 37 万 5 千人になり、大会は同約 16 パーセント増の 290 大会が開かれている（日本経済新聞，2015e）が、大会数が飽和した場合マラソン大会のように差別化が難しい状態になることが懸念される。

サービスや製品の差別化が難しい状態をコモディティ化と言い、それを解決する手段の 1 つとしてサイコグラフィック変数によるセグメンテーションがある。参加型スポーツ大会の消費者を考える場合、参加型スポーツ大会に合致するサイコグラフィック変数を検討する必要がある。参加型スポーツ大会の参加者は消費行動の際に身体運動が伴う消費者である。そして身体運動参加意図には自己効力感という概念が関わっており、自己効力感は参加型スポーツ大会の消費者を理解する上で重要な概念であると考えられる。そこで本研究では参加型スポーツ大会の消費者理解に有効だと考えられる自己効力感に着目することとする。

2. 先行研究の検討

自己効力感（Self-Efficacy）とは“ある行動を自らが成功裏に実行できるという確信”（Bandura，1977）のことを言い、三好（2011）は自己効力感こそが人間の行動のもっとも重要な決定因であると述べている。自己効力感は 2 つの水準に分かれることが示唆されておりその 1 つが「具体的な個々の課題や状況に依存せずに、より長期的に，より一般化した日常場面における行動に影響する自己効力感（Generalized Self-Efficacy, 以下 GSE とする）（成田ら，1995）」である。GSE は人格特性として自己効力感を高くあるいは低く認知する傾向でありそれが行動全般を規定していると指摘されている。そのため行動を理解する上で GSE を検討することは妥当だと考えられる。

しかしサイコグラフィック変数は有益さを指摘される一方で外部からでは判別が困難であるためあまり現場で検討されてこなかったと指摘（井上，2009）されており、現場で活用するためには GSE 単体でなく外部から観察可能なデモグラフィック変数と関連付けて検討する必要があると考えられる。

3. 研究目的

本研究は研究目的を GSE をサイコグラフィック変数と設定しセグメンテーションすることにより示唆されるサンプルの特徴をトライアスロン大会参加者を対象に明らかにすることとする。そのために行動の先行要因として考えられる別の心理変数である動機づけと、外部から観察可能なデモグラフィック変数である年齢、自由裁量所得をサンプ

ルの GSE 高群・低群に分割し t 検定により検討する。

4. 調査項目及び研究結果

（1）調査項目

トライアスロンへの参加動機を測定する尺度は Pelletier et al.（1995）が開発した Sport Motivation Scale とそれを日本語に翻訳した杉山（2005）の研究を参考にして作成され、第 1 回トライアスロン参加者調査（早稲田大学スポーツビジネスマネジメント研究室，2010）で使用されたトライアスロン参加動機項目（以下 SMS とする）7 因子 35 項目を使用した。GSE の測定尺度は三好（2003）が作成した人格特性的自己効力感尺度 1 因子 6 項目を使用した。

（2）サンプルの属性

2015 年 9 月 19 日（土）に行われた村上・笹川流れ国際トライアスロン大会の事前説明会に参加したエイジ部門参加者を対象にアンケート調査を実施した。651 部を配布し 565 部を回収し（回収率 86.7%）、ここから分析対象でないリレー部門に参加するサンプル及び完全回答でないサンプルを除外し最終的に残った 316 部を男女混合サンプルの有効回答とした。男性のみのサンプルは男女混合のサンプルから女性のサンプル 45 部を除外し最終的に残った 271 部を有効回答とした。

（3）調査結果

調査結果の詳細は表 1 から表 4 に記す。

＜男女混合サンプル＞

表 1　SMS の平均値比較

	全体（n=316）		GSE 高群（n=271）		GSE 低群（n=148）		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
理解・成長動機	4.72	1.07	4.99	1.14	4.43	.91	4.88***
外的制御・取り入れ動機	3.07	1.11	3.06	3.06	3.08	1.10	.18
成就動機	5.30	1.08	5.65	.97	4.91	1.08	6.49***
ツーリズム動機	4.57	1.26	4.83	1.28	4.28	1.20	3.94***
非動機づけ	2.27	1.30	1.90	1.10	2.70	1.38	5.66***
刺激経験動機	5.11	1.07	5.44	1.01	4.73	1.00	6.25***
美的動機	5.40	1.15	5.77	1.04	4.96	1.12	6.65***

*p＜.05，**p＜.01，***p＜.001

表 2　デモグラフィック変数の比較

	全体（n=316）		GSE 高群（n=271）		GSE 低群（n=148）		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
自由裁量所得	43305.91	41460.41	50327.38	48226.45	35335.58	30347.51	3.35***
年齢	45.07	10.90	45.54	10.28	44.54	11.58	.81

*p＜.05，**p＜.01，***p＜.(

＜男性のみサンプル＞

表 3　SMS の平均値比較

	全体（n=271）		GSE 高群（n=144）		GSE 低群（n=127）		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
理解・成長動機	4.68	1.08	4.96	1.13	4.37	.93	4.66***
外的制御・取り入れ動機	3.11	1.11	3.08	1.12	3.15	1.10	.55
成就動機	5.27	1.08	5.63	.92	4.86	1.11	6.26***
ツーリズム動機	4.54	1.25	4.82	1.23	4.22	1.21	4.08***
非動機づけ	2.25	1.29	1.87	1.04	2.69	1.41	5.43***
刺激経験動機	5.10	1.06	5.45	.96	4.71	1.02	6.19***
美的動機	5.35	1.14	5.75	.97	4.90	1.15	6.59***

*p＜.05，**p＜.01，***p＜.001

表 4　デモグラフィック変数の比較

	全体（n=271）		GSE 高群（n=144）		GSE 低群（n=127）		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
自由裁量所得	44,482	43547.90	51,805	50768.95	36,178	31744.65	3.07**
年齢	45.40	11.01	45.99	10.44	44.72	11.64	.94

*p＜.05，**p＜.01，***p＜.001

5. 考察及びインプリケーション

両サンプルにおいて非動機づけ（amotivation）項目の平均は低郡が高群より高い結果となった。村上・笹川流れ国際トライアスロン大会はエイジ部門の参加費が 18,000 円かかるため、参加者の殆どは高い参加意欲を持ち参加していることが考えられる。しかし先行研究から非動機づけ（amotivation）はドロップアウトなど運動活動からの離脱に影響する要因だと指摘（藤田ら，2008）されており、高い参加動機を持つサンプルの中でも潜在的に離脱要因が高い群・低い群が存在すると考えられる。

本研究を踏まえマネジメントに生かすための提言として、自己効力感を低下させないための対策または自己効力感を上昇させる方策を講じる必要があると考えられる。